

論文

室町時代朝鮮使節を魅了した西芳寺庭園 Garden of Saiho-ji temple that fascinated Joseon diplomatic missions in the Muromachi period

小野健吉*
ONO Kenkichi

Song Hsieh who was a head of Joseon diplomatic mission to Japan in 1420 and Shin Suk-bu who was a secretary of the mission in 1443 visited Saiho-ji temple in Kyoto and enjoyed strolling around its garden. Especially, Shin described the layout and design of the garden in detail and confessed that he was fascinated by its beauty. In Joseon of those days, gardens were built mainly for viewing, and their important feature was a square pond with a round island designed after Chinese ancient view of the universe. On the other hand, the garden of Saiho-ji temple was planned for strolling around and was elaborately designed using a natural landscape as a motif. The design and use difference of gardens between Joseon and Japan of those days, together with the excellent stroll garden design of Saiho-ji temple, was the reason why they were fascinated by Saiho-ji garden.

キーワード：西芳寺庭園 (Garden of Saiho-ji temple)、回遊式庭園 (Strolling garden)、朝鮮使節 (Joseon diplomatic missions to Japan)、宋希憬 (Song Hsieh)、申叔舟 (Shin Suk-bu)

1. はじめに

西芳寺は南北朝時代に夢窓疎石 (1275-1351) が中興した禅宗寺院で、現在は苔寺の通称でも知られる (写真 1)。夢窓疎石中興後の西芳寺は、立ち並ぶ華麗な堂舎と桜や紅葉などの植栽景観の見事さで知られ、応仁の乱のさなかの文明元年 (1469) に戦火で灰燼に帰すまでの百数十年間は、貴顕がしばしば訪れる勝地としての側面を持つことになる。そうしたなか、観光の観点で特に注目されるのは、李氏朝鮮から派遣された外交使節による西芳寺の訪問である。応永 26 年 (世宗 2 年・1420) の使節の回礼使・宋希憬ならびに嘉吉 3 年 (世宗 25 年・1443) の使節の書状官・申叔舟が西芳寺を訪れ、それぞれ『老松堂日本行録』と「日本栖芳寺遇真記并賦」(『保閑齋集』所収) に境内や庭園の様子を記して高く評価している。李氏朝鮮からの使節 (以下、「朝鮮使節」) は公的な外交使節であり、勝地を訪れる観光が目的でないことは言うまでもない。しかしながら、機会を得て西芳寺を訪れた両者は、その庭景に深く感動した。もちろん彼らの行動は制限されており、自由に訪れたいところを訪れることができたわけではないが、現代ふう言えば、業務海外旅行に伴う兼観光で訪れた名所の素晴らしさに感動し、記録にとどめたわけである。



写真 1 現在の西芳寺庭園

本研究の主たる目的は、朝鮮使節が西芳寺庭園に魅了され、高く評価した理由を明らかにすることである。あわせて、その理由を現在の訪日観光者の文化観光に当てはめることで見えてくる庭園観光の在り方についても触れてみる。研究手法とその手順は、以下のとおりである。

- 1) 夢窓疎石による西芳寺の中興とその後の貴顕の訪問等の史料を改めて整理し、先行研究を踏まえつつ当時の西芳寺の状況を把握したうえで、その庭園の在り方を確認する。
- 2) 宋希憬の『老松堂日本行録』ならびに申叔舟の「日本栖芳寺遇真記并賦」の描写から、当時の西芳寺庭園の空間構成と意匠の詳細を把握したうえで、彼らがそれをどのように受け止め、評価したかを明らかにする。

- 3) 宋希憬・申叔舟の庭園観を推測する基盤として、李氏朝鮮時代の庭園について概観する。
 4) 以上の結果を基に、外国人来訪者であった朝鮮使節の観点からの西芳寺庭園の魅力の理由を推定する。

なお、西芳寺庭園は日本庭園史上きわめて重要な位置を占めることから、外山 (1934, pp.409-429) の論考をはじめとして先行研究は数多い。朝鮮使節の西芳寺来訪については、西芳寺庭園の歴史に関して詳細に記した久恒 (1969, pp.99-222) のほか、重森・重森 (1971, pp.51-92) や中根 (1992, pp.22-39) あるいは飛田 (2006, pp.42-67) が紹介や考察を行なっている。ただし留意しておきたいのは、いずれも、宋希憬と申叔舟の記述を資料として 15 世紀前半の西芳寺庭園の復元考察を目指したものであることである。また、森 (1959, pp.61-63) は、足利義政の東山殿のモデルとしての西芳寺を論じており、詳細な庭園実測図も示している。さらに、高橋 (1997, pp.363-378) は中世における西芳寺庭園の利用を詳述し、関西 (2012, pp.367-372) も造営間もない頃の西芳寺庭園の利用に触れる。その他の中世庭園関連の研究でも、多くが何らかの観点で西芳寺庭園に言及している。本研究では、これらの先行研究の成果に基づきつつ、朝鮮使節が西芳寺庭園に魅了された理由について、当時の李氏朝鮮の庭園との比較も含め、非日常性が重要な要素となる「観光」の視点を取り入れた。

2. 西芳寺とその庭園

(1) 夢窓疎石による中興

多くの先行研究でも指摘されるとおり、夢窓疎石による西芳寺の中興や当時の庭園等の様子については、文和 2 年 (1353) に夢窓疎石の高弟であった春屋妙葩が撰した『夢窓国師年譜』の暦応二年己卯の記事 (以下、『年譜』) ならびに応永 7 年 (1400) に西芳寺住職の急溪中章が著した「西芳寺縁起」(『続群書類従』巻 790 所収、以下「縁起」) が重要な史料となる。

『年譜』では、この寺は聖武天皇の天平年中に行基が造営した四十九の仏寺の一つ (西方寺) であり、平城天皇の皇子で出家した真如親王が住したのち、五百年を経て荒廃していたものを藤原親秀が夢窓疎石を迎えて中興したと記す。一方、「縁起」では、創立は聖徳太子の別墅に遡り、聖武天皇の時代に畿内四十九院の一つとして行基が西方寺を建立、平安寺時代には空海が居を構え、その弟子であった平城天皇皇子の高岳親王が修行したと記す。その後、建久年中 (1190-98) に摂津大守であった中原師員が改修して浄土伽藍としたが、それも荒廃していたところを師員の四代の孫にあたる摂津掃部頭藤原親秀が夢窓疎石を中興開山に迎えて中興したことが記されている。これらの記述のうち、真如親王までの古代の記事は確証がないことから、「縁起」で言えば中原師員による改修の記述あたりからが確かな事実ではないかとする久恒 (1969, pp.141-149) ・飛田 (2006, pp.47-48) らの解釈が妥当であろう¹。藤原親秀から中興開山に迎えられた夢窓疎石は、寺名を「西方寺」から「西芳寺」にあらため、伽藍を整備する。整備された伽藍については、それぞれに、以下のように記されている²。

「…仏殿本安無量寿佛像、今以西来堂扁焉、堂前旧有大桜花樹、春時花敷稠密殊妙、為洛陽奇觀也、…殿南建一閣其上安奉水晶宝塔、名曰無縫、塔之中貯如来舍利一万顆、閣之下曰瑠璃殿、堂閣僧舎之間廊廡環行、隨其地宜繚繞回復、皆備禪觀行樂之趣、開清池導伏流、水出岩罅、潺潺如洗玉、可喜也、白沙之洲、怪松之嶼、嘉樹奇巖間錯林立、船泛漣漪、館影水中、天下絶景、似非人力所能也、名池曰黄金、船所泊之亭曰合同、又直閣之南北立二亭、南名湘南、北名潭北、搜奇顯秘百廢一新、京城卿士大夫騷人墨客泊四方来游者因此壯觀始嚮師道者往往有之、師亦迅筆題廊壁間云、仁人自是愛山静、智者天然樂水清、莫怪愚憊翫山水、只因籍此砺精明、構小亭揭以砺精、又於山之絶頂設亭曰縮遠、其所入門曰向上閣、剪榛開徑為四十九院盤、而登危磴曲折之間苔滑雲粘万木陰森、未到半山別卓小菴扁曰指東、用熊秀才問亮座主故事也、」 (『年譜』)

「…仏殿に本より弥陀如来の三尊を安置しあれば、西方来迎の文字をかね、西来堂と名づけ、…国師天性仮山水のおもむきを得て、嶋々洲崎そのよろしき所にしたがひて仏閣僧舎を建、又そのあいだ奇岩怪樹の有さま、世に九山八海を移し給ふといひ伝へしもかかる事になん、…池の名を黄金と改め、水晶の宝塔に一万顆の舍利をおさめ、閣の上に安奉して無縫塔といひ、閣の下を瑠璃殿といひ、或は無影樹、合同亭、潭北亭など名附て、…

¹ ただし、久恒は、中原師員による改修の時期は師員の年齢から考えて建久年間よりかなり下ると指摘する。

² 『年譜』: 史料 3)、「縁起」: 史料 11) pp.437-446

又山のいただきに縮遠亭あり。その入所の門を向上関といひ。岸の筧を曹源の一滴といひ。蘿をよぢ柴をとりてのぼるこみち四十九めぐりあるを通宵路といふ。そのあいだ苔なめらかに雲粘して万木陰森たる中眞如親王庵堂の跡に座禅堂を建て指東庵と名附。亮座主熊秀才問答の図あり。壳風店は楞伽窟の南にあり。皆禅観行楽の地なり。…」 (「縁起」)

当然ながら、「縁起」は先行する『年譜』を基に書かれているため、重複する記述も少なくない。双方の記述を合わせて解釈すると、夢窓疎石が創りあげた西芳寺の建物と庭は、以下のようなものであったと言えよう。すなわち、仏殿の西来堂を中心とした下の段の庭園は、改修後に黄金池と名を改めた池を中心に舍利殿（上層は無縫塔、下層は瑠璃殿）・合同亭・湘南亭・潭北亭などの堂舎を配置し、それらの建物をつなぐ回廊（廊廡）が巡る。また、岩の裂け目から噴き出す清らかな水がさらさらと流れ下る。白沙の岸辺で縁取られた池の島では、松が見事な形姿を見せるほか、適所に配された奇岩怪樹が庭全体の景色を作り上げている。一方、境内にある山の頂には縮遠亭を設け、そこに至る山道の入口を向上関と呼び、苔むす山道の途中には座禅堂の指東庵を置く。

こうした記述から建物や庭園の概略の様相や雰囲気は窺えるものの、黄金池を中心とする下の段の具体的な堂舎の配置や庭園意匠などは詳らかでない。このため、久恒（1969, pp.181-210）・中根（1992, pp.27-39）・飛田（2006, pp.52-57）らは、朝鮮使節の宋希憬・申叔舟による西芳寺訪問記、とりわけ詳細な記述のある後者を、夢窓疎石造営当初からの西芳寺の堂舎・庭園の具体的な姿を復元する重要な史料として取り上げるのである。本稿の主題でもある両史料については、第 3 章で詳述する。

なお、『年譜』「縁起」双方に見える「禅観行楽」の語にも注目しておきたい。池を中心に意匠を凝らした庭園の中に西来堂や舍利殿だけでなく複数の亭を配し、それらを回廊でつなぐという画期的な空間構成を持つ西芳寺は、『年譜』に京都の貴顕や文人らが訪れることが記されるように、禅修行の場であるとともに、貴顕・文人らの遊楽の場でもあったのである³。こうした類まれな形態と機能を持つ寺院であったればこそ、西芳寺は遠来の朝鮮使節が訪問を薦められる場となったわけである。

（2）室町時代における貴顕の来訪

夢窓疎石によって中興された西芳寺は、かつてなかった建物配置ならびに建物と一体となった庭園景観が造営当初から高く評価された。応仁の乱のさなかの文明元年（1469）4月に焼失するまでは、夢窓疎石存命中における光厳上皇の御幸や光明天皇の行幸をはじめとして、歴代室町將軍の御成を含め、多くの貴顕が西芳寺を訪れている。これらを記した日記等の中には、西芳寺庭園の景観や訪れた貴顕の行動についての記載も多数にのぼる。以下にそうした記載を例示しておく。

①『園太暦』貞和 3 年（1347）2 月 30 日（光厳上皇の西芳寺御幸）⁴

「自是可幸西方寺云々、…、未暮之間著御、庭花盛開、有感有興、花陰立胡床数脚、上皇以下東堂并諸卿候之、暫握翫、其後御乗船、御料舟一艘、有小屋形、乗御、外花山院大納言候之、又一艘、予・左金吾・殿上人少々乗之、今一艘、大夫・左兵衛督・東堂等乗之、又殿上人少々同乗之、容與花陰、誠非言語所及、一兩反漕廻之間、予奏云、花下春興不能欲罷、堪事之輩在船、可令奏樂歟、…」

②『園太暦』貞和 5 年（1349）3 月 26 日（光明天皇の西芳寺行幸）⁵

「其後幸西芳寺、池辺花盛也、先有御乗舟事、其後供茶湯等、其後還御云々」

③『園太暦』観応 2 年（1351）3 月 21 日（足利尊氏の西芳寺御成）⁶

「伝聞、今日將軍并武衛禅門・宰相中将向西芳寺、為歴覧花云々、…」

④『空華日用工夫略集』永徳 2 年（1382）10 月 13 日（足利義満の西芳寺御成）⁷

³ 寺院が貴顕の遊楽空間となった事例としては、源頼朝が鎌倉に創建した永福寺がある。『吾妻鏡』には、花見（建保 2 年 3 月 9 日・建保 5 年 3 月 10 日・寛喜元年 3 月 15 日・建長 2 年 3 月 10 日・文応元年 2 月 18 日）、和歌会（建保 5 年 12 月 25 日・寛喜元年 10 月 26 日・貞永元年 11 月 29 日）などの記事が見える。

⁴ 史料 1) pp.146-147。『園太暦』は、南北朝期の公卿・洞院公賢（1291-1360）の日記。

⁵ 史料 2) p.52

⁶ 史料 2) p.439

⁷ 史料 10) p.177。『空華日用工夫略集』は、夢窓疎石の弟子の禅僧・義堂周信（1325-1388）の日記。

- 「承府君命、赴西芳精舎紅葉之会、...、君換衣着道服袈裟、独往指東庵、閉戸座禪、...、及晩、令下條召余、々乃上指東庵、与君對話、...、君令管領引撰政等、出於寺外而晩食、君独持齋而不赴、及夜月出、及相引下指東庵、月影微々、林木陰中、布襪草履而下、岩前路峻、側歩而坂方丈富土間、及太清等諸老在焉、君命令座禪、以撰政至而為限、...、及四更報、君座禪如前、禪罷仮寐、粥罷又座禪、号巳時座禪、以点心報而為限、凡一時半也、点心罷、君起換衣、復上指東庵、独坐禪定、蓋惜別於坐禪、且慕開山遺蔭也、...」
- ⑤『空華日用工夫略集』至徳元年（1382）閏 9 月 18 日（足利義満の西芳寺御成）⁸
「陪大丞相泊諸禪師、遊于西芳精舎、及婦詩作二首、録呈閣下曰、相国遊山野趣長、故我輩共林塘、...、自笑不才林下客、追陪王謝忝同遊」
- ⑥『満濟准后日記』応永 33 年（1426）10 月 14 日⁹
「、公方様嵯峨景德寺入院ニ渡御、并西芳寺紅葉為御覧入御云々、...」
- ⑦『満濟准后日記』永享 3 年（1431）10 月 19 日（伏見宮貞成親王の西芳寺訪問）¹⁰
「...、自其罷出西芳寺、紅葉以下地景絶言慮了、勝鬘院々主同道、西芳寺坊主出對、所々悉一見、乗船等催逸興了。帰路西芳門前於巖拙、少點心在之、」
- ⑧『看聞御記』永享 5 年（1433）3 月 18 日（伏見宮貞成親王の西芳寺訪問）¹¹
「...、其後寺中見廻、前水地景言語非所覃也、乗船、長老、院主、宰相以下乗之漕廻、其興甚深、次指東庵ニ参、国師御影焼香、次縮遠、凡寺中悉見廻、浄土八功德水如然歟、養眼外無他、」
- ⑨『蔭涼軒日録』永享 8 年（1436）2 月 21 日¹²
「自聯輝被進上、白鴨十一、被放西芳寺池中」
- ⑩『看聞御記』永享 10 年（1438）10 月 30 日（伏見宮貞成親王の西芳寺訪問）¹³
「...、紅葉など為歴覧云々、晩景帰参、於寺家齋食、其後乗船、寺中悉廻覧、紅葉得盛殊勝云々、谷堂等歴覧云々」
- ⑪『蔭涼軒日録』寛正 3 年（1462）2 月 15 日（足利義政の西芳寺御成）¹⁴
「...、西芳寺看花之御成被成、蓮花盛開之時、可有御覧之由被仰出也、蓋為未被御覧蓮花之謂也」
- ⑫『蔭涼軒日録』寛正 3 年（1462）6 月 19 日（足利義政の西芳寺御成予定）¹⁵
「...、来廿三日、西芳寺依蓮華盛開御成之事被仰出也、華之時御成、被成蓮之時也」
- ⑬『蔭涼軒日録』寛正 3 年（1462）6 月 23 日（足利義政の西芳寺御成）¹⁶
「...、御成、坊主項首座、被懸于御目也、仏殿御焼香、被乗御船也」
- ⑭『蔭涼軒日録』寛正 3 年（1462）10 月 11 日（足利義政の西芳寺御成）¹⁷
「...、泉水御覧、舍利殿御登覧并御焼香、満林青松、翠木之間、楓樹如錦、每度雖被御覧、美景不滅由、有御称美也、...」
- ⑮『蔭涼軒日録』寛正 4 年（1463）10 月 5 日¹⁸（足利義政の西芳寺御成）
「...、御成、御齋、富士間御手水以後、...、蔵室御焼香、泉水御覧、次舍利殿御焼香、次西来堂御焼香、潭北御覧、屢刻移、以遂御成于御経王堂、故不被乘于御船也、...、池面水潔、紅葉纔残。風景尤勝也、...」
- ⑯『蔭涼軒日録』寛正 5 年（1463）2 月 27 日¹⁹（足利義政の西芳寺御成）
「...、御成、御齋、...、花皆老木、而花稀也、満庭着雨松添翠、池跳玉尤景絶、勝于恒也、依雨不乗船也、御遊

⁸ 史料 10) p.200。

⁹ 史料 4) p.320。『満濟准后日記』は、室町時代前期の醍醐寺座主・満濟准后（1378-1435）の日記。

¹⁰ 史料 5) p.323。

¹¹ 史料 12) p.99-100。『看聞御記』は、室町時代の皇族で伏見宮 3 代目である貞成親王（1372-1456）の日記。

¹² 史料 7) p.20。『蔭涼軒日録』は、室町時代の相国寺鹿苑院内蔭涼軒主による公用日記。永享 7 年（1435）から文正元年（1466）までは季瓊真藁、文系 16 年（1484）から明応 2 年（1493）までは亀泉集証が書いた。

¹³ 史料 12) p.577。

¹⁴ 史料 7) p.334。

¹⁵ 史料 7) p.350。

¹⁶ 史料 7) p.351。

¹⁷ 史料 7) p.370。

¹⁸ 史料 7) p.430。

¹⁹ 史料 7) p.455。

覧、御焼香如恒也、...」

⑰『蔭涼軒日録』寛正 5 年 (1463) 10 月 2 日²⁰ (足利義政の西芳寺御成)

「...、御成、御齋、於富士間而御手水、...、舍利殿御仏殿御焼香、指東庵、縮遠亭御遊覧、山路険阻難攀、而倦滞聊御一笑、実衰老所致汗愧々、被乗于御船也、青松紅葉四面如織、御遊歴緩々多情倍于恒也、...」

⑱『蔭涼軒日録』寛正 6 年 (1464) 6 月 26 日²¹ (足利義政の西芳寺御成)

「...、御成、御齋、於富士間御手水、於蔵蜜御焼香、御談餘刻移、泉水歴覧、舍利殿并仏殿御焼香、潭北御覧、林端御経行、不被乗于御船、蓋炎天之謂乎、蓮華纒華開、芬芳満池、山秀水緑、絶勝倍萬于旧也、...」

当時の西芳寺の庭園景観や貴頭の西芳寺訪問についてこれらの日記の記述から窺える事柄を、先行研究の成果も援用しながら、以下に取りまとめておこう。

まず、池 (黄金池) を中心に舍利殿や西来堂などの堂舎が立ち並ぶ下の段の庭園の植栽では、造営当初から桜が見事であったほか、松が多く、松の濃い緑と紅葉した楓が秋には見事なコントラストを見せていた (上記①②③④⑥⑦⑧⑩⑭⑮⑰)。さらに、足利義政の頃は池の蓮も見事であったようである (⑪⑫⑬⑱)。また、池には水鳥が放たれていた (⑨)。一方、向上関から登った上の段の指東庵横の洪隠山の枯山水石組についての記述はどの史料にもない。このことについて飛田 (2006, pp.57-61) は、この石組が夢窓疎石によって造られたものではなく、足利義政が亡くなった後の時代に付け加えられたのではないかと推測する²²。

また、貴頭の訪問は、寛正 3 年 (1462) 6 月 23 日や寛正 4 年 (1463) 6 月 26 日の蓮見物 (⑬⑱) などもあるものの、2~3 月の花 (桜) の時期 (①②③⑨⑪⑮) と 9~10 月の紅葉の時期 (④⑤⑥⑦⑩⑭⑮⑰) が大半である。このことは、貴頭の西芳寺訪問は、桜や紅葉の見物²³に主眼が置かれていたこと、すなわち庭園を楽しむことに主眼が置かれていたことを示している。もちろん参拝や焼香といった宗教的行為は行うのであるが、座禅については永徳 2 年 10 月 13 日に足利義満が指東庵で繰り返す何度も坐禅をおこなったという記述が突出するだけで (④)、総じて禅宗寺院への参拝という意識が特に高かったとは思えない。それに対し、多く記録されているのは、池での舟遊びや境内 (庭園) の回遊あるいは楼閣などからの庭景の鑑賞であり (①②③④⑤⑥⑦⑧⑩⑪⑬⑭⑮⑰⑱)、こうした行為が彼らの西芳寺訪問の目的と言ってしまうのではないだろう。また、長時間の滞在に伴う喫茶や食事も大きな要素であった。初期の上皇の御幸では、舟遊びで平安時代の寝殿造庭園での宴と同様に奏楽が行われることもあった (①)。一方で、黄金池周辺の主要伽藍だけでなく高所において京都方面への眺望が楽しめる縮遠亭まで含めて庭園をくまなく巡るといふ寝殿造庭園では見られない利用も見られる (⑧⑰)。すなわち、喫茶や食事も含め、徒歩や舟で移動しながらいわば総合的に庭園全体を享受する利用がなされていたわけである。

(3) 回遊式庭園の嚆矢

庭園史学では、茶の湯の場としての茶室を必須の要素として組み込み、接遇としての茶事等を目的の一つとして池庭を廻る様式を「回遊式庭園」と位置付け、江戸時代初期の桂山荘 (桂離宮) をその初例とするのが一般的な理解である (小野 2004, pp.54-55)。そして、大名によって大名庭園として多く築造されたこの様式は、江戸時代を代表する庭園様式とされている。

しかしながら、『蔭涼軒日録』長享 3 年 (1489) 6 月 16 日条に見える亀泉集証の訪問記事などを見ると、桂山荘に先立ってほぼ同様の用い方がなされた足利義政の東山殿を回遊式庭園の事例として挙げるのが可能である (小野 2009, pp.126-127)。桂山荘と東山殿の造営時期には百数十年の差があるが²⁴、この間の大半を占める戦国時代の武将館や寺院では座観式庭園が主流であり、戦乱を終結させた織豊政権下の安土桃山時代においても上記のような回遊は伴わない座観式の書院造庭園や茶庭が主流となった。こうしたことを考え合わせると、回遊式庭園の築造がこの間において非連続的であることの説明はつく。さらに、東山殿のモデルが西芳寺であることは、森 (1959, pp.61-

²⁰ 史料 7) p.499。

²¹ 史料 8) p.543。

²² 飛田は、西芳寺の空間構成をモデルに義政が造営した東山殿 (現在の慈照寺) に洪隠山石組に相当する明確な部分がないことを根拠に挙げるが、くわえて足利義政の頻繁な西芳寺訪問の記録のなかに一切この石組に関する記述がないことも飛田の推測を補強する。

²³ 造営当初などからの桜が足利義政の時代には老木になって花の数が減少したとの記述「花皆老木、而花稀也」(⑮) があるのが興味深い。

²⁴ 足利義政による東山殿の初期造営は 1489 年から、智仁親王による桂山荘の初期造営は 1615 年頃からである。

63) ら先学の指摘するとおりである。前節でみた貴顕による西芳寺の来訪記録の内容も考え併せれば、東山殿のモデルとなった西芳寺を回遊式庭園の嚆矢と捉えることも決して誤りではないと言えよう。

3. 宋希憬『老松堂日本行録』と申叔舟「日本栖芳寺遇真記并賦」

(1) 宋希憬『老松堂日本行録』

世宗 3 年 (応永 27 年・1420) 1 月 15 日に宋希憬を回礼使とする朝鮮使節が京城を出発。京都に到着したのは 4 月 21 日、将軍・足利義持に国書を奉呈したのは 6 月 16 日、そして京城に帰着し復命を完了したのが 10 月 25 日であった²⁵。9 か月に及ぶこの日本訪問の紀行が『老松堂日本行録』である。

京都到着の翌日から深修庵に滞在していた宋希憬らの朝鮮使節は、折衝を経てようやく 6 月 16 日に宝幢寺²⁶で将軍に国書を奉呈する。そのあと山海の珍味でもてなされ、義持の勧めで天龍寺・臨川寺・西芳寺を遊覧する (森 1959, p.58)。そして、各寺では謝礼の詩を詠んでいる。この三寺は、夢窓疎石が開山あるいは中興開山であり、いずれも夢窓疎石作の庭園が備わっていた。しかし、天龍寺の庭園については詩のなかで特に触れられておらず、臨川寺と西芳寺は詩のなかで以下のとおり庭園が取り上げられている²⁷。

「遊臨川寺贈主師」

清晨騎馬入臨川 一見高師思豁然 五月林塘人骨冷 小樓嘉樹亦堪憐
○池辺楼前本国所無嘉卉異花森列

「遊西方 (芳) 寺」

花林池水作清涼 松竹烟霞午梵長 半日坐來探勝事 東区自有一西方
○此寺東軒下鑿大池、池中築三小島、一島種青松鋪白砂作亭、二島構小樓、西島楼上藏各色舍利、水自花林下流入、遊魚滿池、又有浮鴨、三島往來時所乘小舟在焉、池三面花木叢鬱、剪作二層、滿山松竹也

詩および注記 (○) の内容を見ると、臨川寺では、池辺の楼閣とその一帯の朝鮮では見られない植栽が取り上げられる。これに対し、西芳寺では、花の咲く植栽や池が涼しさをもたらしていることを詩で表現したうえで、園池や庭園植栽の様子などが簡潔ではあるものの情報量豊かに注記のなかで記されている。詩や注記の在り方から考えると、宋希憬に感動をより多く与えたのが西芳寺の庭園であったことは疑いない。

宋希憬は、西芳寺の庭園内の堂舎の配置等について、①方丈の東に大池 (黄金池) があること、②池には三つの島があること、③白砂青松の一つめの島には亭があること、④二つめの島には小樓があり、この西の島の楼は舍利を納めた楼 (舍利殿) であること、を記している。こうした記述は、現況や 2 章 (2) に示した貴顕来訪時の記述、さらに後述する申叔舟の「日本栖芳寺遇真記并賦」の記述とは整合しない部分もある。宋希憬は、6 月 16 日当日に来日の目的であった将軍への国書奉呈を終えた後、天龍寺・臨川寺・西芳寺を訪れており、それぞれの滞在時間はそれほど長くなかったはずである。そのため、西芳寺においても空間の把握の一部に誤解が生じていた可能性がある。例えば、舍利殿が西の島に建っていたとの④の記述は、飛田 (2006, p.53) も指摘するように、舍利殿が池に突き出た半島 (出島) に建っていたため島の上に建っていると誤認したことが考えられる。一方で、白砂青松の島に亭があるとの③の記述は、申叔舟の記述と照合すると、湘南亭の立地を正しく描写したものと見てよいだろう。

(2) 申叔舟「日本栖芳寺遇真記并賦」(『保閑齋集』)

1) 庭園の意匠と堂舎の配置

世宗 26 年 (嘉吉 3 年・1443) の朝鮮使節に書状官として参加した申叔舟は、このとき二十代の半ば過ぎであった。王家の一族で、その後官僚として栄達を果たした申叔舟は詩文にも優れており、亡くなって 5 年後の成宗 10 年 (文明 11 年・1479) には彼の詩文を編んだ『保閑齋集』が制作されている。そして、この『保閑齋集』の巻第一の冒頭に収められたのが、「日本栖芳寺遇真記并賦」²⁸である。まず、堂舎の配置と庭園の意匠等を知る上で参考

²⁵ 史料 6) p.1

²⁶ 康暦元年 (1379) に足利義満が創建した寺院。開山は春屋妙葩。今は廃絶し、開山堂であった鹿王院のみ現存する。

²⁷ 史料 6) pp.96-97

²⁸ 史料 9) pp.1-4

になる部分は以下のとおりである。

「...遊相国寺、越三日又遊于西山之天龍寺、遂歴栖芳寺而息焉、寺之中引溪流于林表、匯之爲池、周回可三百余歩、池之西有瑠璃之閣、自閣北行、有橋通于西来堂、橋之西皆植芙蓉、時方盛開、清風微至、幽香馥馥擁鼻、橋東南則無之、若橋爲之限隔也、西来堂之後軒、号曰潭北、溪流之所經而入于潭之处也、以奇岩恠石、駢列而激之、清冷可愛、...湘南亭居池之心而近乎南辺、亭之南欽其堤、以泄池水而流其惡、有小島、羅峙於亭之左右、而其数四、皆植松樹、剪其枝葉令不得縦而若老枯者然、四面嘉花異卉擁之、其枝幹亦皆繩引而木支之、盤結交柯鬱不可窺、僧言方春和時群花齋發、宿莽競秀、蒼然穎然、若錦焉若綉焉、不可得而状也、余聞之惘然恨其不遇也、池形縈回稍長、遂作橋横絶其腰、以便往来于池之東南者、因橋有小閣、扁曰邀月之橋、登之悦如騎長鯨而浮溟渤也、...、凡洲渚諸島、回曲直達、若天作地設、而不出於山人閑賞巧度之妙、」(下線・二重下線は筆者)

この記述を詳細にたどった久恒 (1969,pp.181-210)・中根 (1992,pp.27-39)・飛田 (2006,pp.52-57) らの解釈を参考にしながら、当時の西芳寺の堂舎の配置ならびに園池・植栽等について、以下に取りまとめておく。

まず、堂舎・橋の配置については、以下のようなことがわかる (上記原文の二重下線)。

- ・瑠璃閣 (舍利殿) は池の西にある。
- ・舍利殿の北の橋を渡ったところに西来堂がある。なお、この橋の橋脚の基礎の遺構が、いま「夜泊石」と俗称される池中の 2 列の石列である (中根 1992,p.32)。
- ・西来堂の背後 (北) には、潭北亭がある。
- ・湘南亭は、池の南岸近くにある中心的な島の上にある。
- ・池の東南部の行き来のために亭橋の邀月橋を架ける。橋からの眺めも素晴らしい。

次に園池・植栽等の状況は以下のように記される。(上記原文の下線)。

- ・川 (西方寺川) から境内に水を引き入れて池に注水している。
- ・池は、周囲が三百歩の大きさ。「歩」の解釈は難しいが、現況と照らし合わせると、文字通りの人の「一歩」と考えるのが妥当。一歩を 60 cm とすれば、池の周囲は 180m ほどということになる。
- ・橋の西側の水面には「芙蓉」が植わっている (東側にはない)。この時期に満開で芳香があるとの記述などから、「芙蓉」は「蓮」と解釈できる。
- ・潭北亭の背後には奇岩恠石の石組を施した溪流がある。
- ・湘南亭の建つ島の対岸にあたる池の南岸で堤が切れており、そこが池水の排水口となっている。
- ・湘南亭の建つ島の左右にも 4 つの島がある。
- ・その 4 つの島にはすべて松が植わっており、それらは剪定されている。
- ・そのほかにも朝鮮にはない珍しい植物が植えられており、樹形を保つために縄で幹や枝が引っ張られている。
- ・桜の木があり、寺僧の説明では、春の満開の時期は素晴らしく美しいとのこと。
- ・池の形はやや長い。

こうした解釈から想定される主要堂舎等の位置を、西芳寺境内図 (森蘊作成) の上に示しておく (図 1)²⁹。

2) 申叔舟の園内行動と退出後の評価

次に、「日本栖芳寺遇真記并賦」に記された申叔舟の園内での行動ならびに退出後の庭園に対する評価についての記述を以下に示す。まず、園内では前述したような素晴らしい景観を備えた庭園を巡るうちに、申叔舟は次のよ

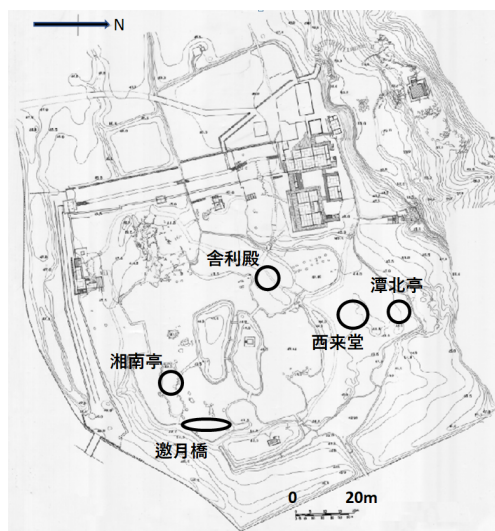


図 1 西芳寺 15 世紀前半建物等想定位置

²⁹ 久恒 (1969,p.102-103) と飛田 (2006,p.56) が各々示した推定配置図と概ね同様であるが、前者とは邀月橋、後者とは湘南亭の位置が異なる。

うな行動をとる。

「於是投冠捐佩、披襟散步、清可以滌煩、幽可以静慮、怡愉散浪、擬挾飛仙遊於蓬瀛之上、而忽忘身在羈旅之中也、」

つまり、申叔舟は冠を脱ぎ捨て、腰の飾り玉を外し、襟を開いて園内の散策（回遊）を楽しみ始めるのである。そして、庭園の清澄は煩いを洗い流し、幽玄は心配事を静めるものであり、喜びと楽しさがあふれ出して神仙が住むという蓬莱瀛州に遊ぶような気分となり、自分が旅行中であることも忘れてしまう、と記す。

そうした素晴らしい空間体験は、西芳寺を後にした後も消え去ることはなかった。その感動のため容易に寝付けなかったが、ようやく眠りにつくと、髭や眉も白い老翁が夢枕に立つ。翁との応答は次のようなものであった。

「西山之栖芳寺我国之勝地、今子之遊、亦有所樂於此而有所得乎、余忘之曰、余之来也、水行数千里、所歴洲渚島嶼之奇吐夫京都諸寺池塘之妙、固亦奇矣妙矣、而悉不能彷彿於栖芳、則誠如翁之所言、一国之勝地也、其遊之樂而幽閑之趣、有得於懷者可知矣、...」

西芳寺は我国一の勝地であるが、一日そこに遊んで得るところがあったかとの老翁の問いに対し、はるばる朝鮮から京都まで来る途上で美しい島嶼の景色も目にし、京都に来ていくつかの仏寺の園池の美しさにも接したが、この西芳寺に及ぶものはなく、まさしく日本一の勝地であり、その奥深く静かな有様は心に深く残っていると答えているのである。もちろん老翁は申叔舟自身の感動の反映であり、往路で目にした瀬戸内海の海景や京都の他の寺院庭園も素晴らしかったが、それらをはるかに凌ぐ西芳寺庭園こそが日本一の勝地だというのが、申叔舟の評価であったわけである。

久恒 (1969, pp.185-187) は、申叔舟が帰国後に西芳寺に思いを馳せてその情景と感動を詠んだ『保閑齋集』所収の数篇の詩文を紹介しており、これらの詩文からも西芳寺の訪問体験が申叔舟にいかにか大きな感動を与えたかを窺うことができる。

4. 李氏朝鮮とその庭園

(1) 李氏朝鮮と室町時代の訪日朝鮮使節

朝鮮国（以下、「李氏朝鮮」）は、李成桂が 1392 年に高麗王位を篡奪して建てた国家である。李氏朝鮮は、当初は王族間での争いにより混乱が生じたものの、三代・太宗（在位 1400～18）の時代に中国・明から朝鮮王に冊封され、諸制度も整った。三代・太宗を継いだ四代・世宗（同 1418～1449?）の時代が李氏朝鮮の最も安定した時代と言われるが、王位継承翌年にあたる世宗 2 年（応永 26 年・1419）には倭寇討伐を掲げて対馬に侵攻するも反撃にあって撤収するという事態が生じた（応永の外寇）。この事態に対し、同年、室町幕府は大蔵経要請を名目として博多妙楽寺の僧・無涯亮倪を朝鮮に派遣し、翌年にその回礼使（正使）として日本を訪れたのが宋希懐であった。朝鮮使節としては、倭寇禁止要請・国情探索などの目的で計画した太宗 13 年（応永 20 年・1413）の使節が正使の発病で中止となっており、この宋希懐の使節が実質的に李氏朝鮮から日本への最初の使節であった。その後、將軍襲職祝賀や倭寇禁止要請などを目的として室町時代に実際に日本を訪れた朝鮮使節は、世宗 11 年（永享元年・1429）、世宗 21 年（永享 11 年・1439）、世宗 25 年（嘉吉 3 年・1443）の 3 回である（三宅 1998, pp.706-708）。そして、この室町時代最後の使節に書状官として名を連ねたのが申叔舟であった。

(2) 李氏朝鮮時代の庭園

朝鮮半島の庭園の歴史を見ると、三国時代（4～7 世紀）の新羅・百濟については発掘調査で一定程度解明され、研究も比較的進んでいるが、高麗時代の庭園は文献上の記載はあるものの遺構は極めて少なく、研究もあまり進展していない。李氏朝鮮時代の庭園については、元・白 (1991, pp.1-6) が、王宮・隠棲住宅（別荘）などの庭園の存在が知られものの見るべき研究成果が蓄積されているとは言い難いと指摘したうえで、この時代に造られた宮闕 4 ヶ所、住宅庭園 10 ヶ所、別荘庭園 6 ヶ所、樓亭庭園 7 ヶ所を研究対象として取り上げ、池塘に注目して現地調査・文献資料調査・ヒアリング等から作庭思想及び手法を検討し、次のような結論を導いている。

・朝鮮時代の池塘は方池円島が多く、園林（庭園）の立地は風水地理説、また形態は神仙思想・陰陽五行説の影

響を受けていると推測できる。

- ・池塘は実用的機能より、鑑賞に重点をおいていると言える。
- ・護岸の処理は石築（石積み）や土堤による単純な形で、主な手法は石築である。
- ・水の取扱いにおいて、水の流れは陰陽五行説と風水地理説の影響を受けて北東から南西へ、また導水手法としては水路を利用したことが多い。

また、中島・内田（2021, pp.369-424）は、韓国で名勝に指定された庭園や文献上知られる庭園を対象として先行研究を踏まえた整理を行い、李氏朝鮮時代の庭園について以下のような事例を紹介している。

- ・当初の正宮であった景福宮には、方池円島の意匠を持つ香遠池、方池方島の意匠を持つ慶会楼園池がある。
- ・離宮として造営され、後に正宮となった昌徳宮では、散策・饗宴・武術披露・年中行事・祭祀等の中国の禁苑の機能を継承する場として後苑（秘苑）が丘陵部に造営された。その一角をなす宙合楼園池は方池円島、愛蓮池は中島のない方池であり、現在は半島池と呼ばれる尊徳亭の園池も本来は方池であった。
- ・韓国西南部全羅南道の大興寺の一画にある茶亭・一枝庵の周辺は池を配した茶庭となっている。
- ・両班住宅は背山臨水の立地からの眺望を重んじている。大門や別堂付近に方池を配する例も見られる。

さらに、藤井（2022）は、李氏朝鮮時代の庭園について「王宮園池」「両班住宅」「隠棲庭園」に分類したうえで、以下のように概括している。

- ・王宮庭園については、王宮（宮闕）が外朝（役所空間）・治朝（王の治世空間）・燕朝（王の生活空間）に区分され、それぞれに特徴的な庭園が配される。景福宮では、治朝に方池が配され、その方島には迎賓施設の慶会楼が建ち、燕朝の園池の島（円島）には香遠亭が建つ。また、昌徳宮・昌慶宮では、外朝で列状・碁盤目状の植栽、治朝で薄石舗装の整形空間に人工的装飾、燕朝で自然地形の中に園池や瀟洒な庭園建築を配した園遊空間が見られる。
- ・官僚（文官・武官）の住宅である両班住宅については、男性の住む舎廊棟と女性の住む内棟に区分され、前者では幾何学的に配置された自然樹形の植栽、後者では植栽のない平庭や果樹などを植栽したサービスヤード的空間が造られる。
- ・政治の世界から退き文人的生活を送る元官僚等による隠棲庭園は、自然環境に恵まれた立地を選び、隠棲の意志や理想郷・仙境を求める意図の庭園となる。そうした中で、川をせき止めてつくった園池が灌漑用の溜池を兼ねるといった治世のあるべき姿を示した構成が見られる事例もある。

李氏朝鮮時代の庭園について、上記の研究成果等を基に改めて整理すると、次のようになる。

- ・庭園が築造される場としては王宮・両班住宅・隠棲住宅が挙げられる。とくに造形的な庭園が営まれたのは、王宮と一部の隠棲住宅（別荘）であり、仏寺に造形的な庭園が営まれることはほとんどなかった。
- ・庭園の立地や形態には、風水地理説・背山臨水概念・神仙思想・陰陽五行説の影響が窺える。
- ・造形的な庭園である池庭は、陰陽五行説に基づく「方池円島」の形態を持つものが多く、機能としては鑑賞に重点が置かれていた。
- ・園池の護岸処理は石を規則的に積み上げた石築や土堤による単純な形で、多くは石築が用いられている。
- ・植栽は自然樹形を基本としていたと見られる。
- ・王宮庭園では、庭園建築も重要な構成要素であった。

なお、上記で示されたのは、いずれも 14 世紀末から 20 世紀初頭に至る李氏朝鮮時代を通じた庭園の特色であり、宋希憬・申叔舟が日本を訪れた 15 世紀前半以前に限られたものではない。特に隠棲庭園は 16 世紀以降に盛行したものとされ、宋希憬・申叔舟の時代にはあまり見られなかったものではある。とはいえ、それらも従来の作庭思想や作庭手法を踏襲している面が多いことは明らかであり、15 世紀前半以前の李氏朝鮮の庭園も、概ねここに示されたような特色があったと考えてよいだろう。

5. 考察

まず、造営から 80 年あるいは 100 年を経た西芳寺庭園を訪れた朝鮮使節がそれを高く評価した理由について考察しておきたい。

宋希憬は、将軍義持の薦めで天龍寺・臨川寺・西芳寺を訪れる。仏教寺院に造形性豊かな庭園が造営されていること自体が李氏朝鮮では見られない事象であり、宋希憬はこのことにも非日常の異国情緒を感じたはずである。園

池のデザインにしても、自国で見られる石筑護岸の方池円島などは全く異なった自然風景を思わせる形状である点が極めて新鮮であったに違いない。ただ、三つの寺院を詠んだ詩あるいは付随する注記を見ると、天龍寺では特に庭園の情景に触れておらず、臨川寺では池に面する楼の前に植わった本国（朝鮮）にはない植栽について記すにとどまっている。これに対し、西芳寺では、庭園のなかの堂舎の位置、園池のなかの島の様子、園池にいる魚や鴨、舟遊に用いられる小舟、花木や松竹といった植栽の様子などを、簡潔ながら具体的に記している。このことは、宋希憬にとって、西芳寺における園池・植栽と堂舎・橋などの構築物が一体をなした形態、そして変化する庭園景観を楽しみながら回遊するという行為が自国では味わうことのなかった極めて新鮮な体験であったことを示している。ちなみに、天龍寺庭園と臨川寺庭園も夢窓疎石の作庭であり、今も良好な状態で遺る天龍寺庭園の滝石組一帯の意匠は日本庭園史上屈指のものと評価されるが、回遊式ではなく座観式であったため、宋希憬は西芳寺で覚えたほどの感動は覚えなかったものと推測できる。

申叔舟は、西芳寺での自らの回遊行動を詳細に記している。その記述は、日本の史料でも窺い知れない堂舎の配置のほか、園池の規模と水源ならびに導排水路の位置、池中の島や園内の石組、さらに植栽の様子にまで及んでいる。これは、申叔舟が堂舎と一体となった自然風景的な形態を持つ異国の庭園に非常に感動し、おそらく現地での様相を書き留めたことによるものと考えられる。とすれば、その記述の信憑性は相当に高いことになる。また、使節の一員として日本にいるにもかかわらず、日常の煩わしさや心配事を忘れさせてくれるこの庭園の清澄かつ幽玄な雰囲気の中を回遊することは、神仙世界に遊ぶ気分だと彼は述べる。その感動は退出後も醒めず、夢枕に立った翁とのやり取りのなかで西芳寺こそが日本一の勝地であると讃えるのである。西芳寺庭園に対するこのような極めて高い評価は、堂舎と園池・植栽などが織りなす西芳寺の傑出した庭園空間ならびにそのなかを回遊（散策）するという自国にはない庭園での体験に基づくものとみなすことができよう。

以上から窺えるとおり、朝鮮使節による西芳寺庭園の高評価の第一の理由は、池を中心に堂舎が適所に配置され、多彩な植栽が施された庭園全体を廻って楽しむ「回遊式庭園」であったことに求められよう。さらに、西芳寺庭園の回遊の効果を極大化したのが、自然風景をモチーフとする傑出した空間構成と細部意匠であったことは言うまでもないし、貴顕が頻りに訪れる勝地的性格を持つ寺院として、西芳寺の堂舎・庭園の管理が行き届いていたことが大きく効いていることも間違いなからう。

当時の李氏朝鮮では、日本の回遊式庭園と類似の様式の庭園は存在せず、園池の形態も観念的な方池円島が主流で、護岸等の細部意匠の造形も変化に乏しく、そもそも王宮などの限られた場所以外で造形的な庭園を築造する文化はほとんど見られなかった。そうした庭園空間の体験にとどまっていた宋希憬と申叔舟にとって、奈良時代以来連綿と自然風景式の庭園を造営し享受する文化を紡いできた日本において夢窓疎石という傑出した才能が成し遂げた西芳寺の庭園空間は、異国という非日常性ととともに、それを超える大きな感動を感じるものであったと解釈できよう。一方で、西芳寺庭園を高く評価する感受性とその構成や意匠を的確に文章化する二人の知性も忘れてはならない。そこに、漢字を共有し、相互理解可能な知を育んできた東アジア文化圏の歴史の重みを感じずにはいられない。

ところで、2 章 (3) で、西芳寺庭園が回遊式庭園の嚆矢とも位置付けうることを論じたが、夢窓疎石が回遊式庭園という様式の着想に至った理由について考えてみたい。結論的に言えば、その理由は、一所に留まるとなく諸国を巡って修行を重ねた夢窓疎石の経歴に求められるのではないか。その諸国遊行の概略を、「夢窓疎石関係事項年表」(玉村 1958, pp.343-380) から以下に記しておこう。

少年時代に仏門に入った夢窓疎石は、正応元年 (1292)、18 歳のときに、甲斐の国から奈良東大寺戒壇院に上って慈観律師より具足戒を受けている。永仁 2 年 (1294) には、京都の建仁寺の無隠円範のもとで参禅。正安元年 (1299)、25 歳のときには鎌倉建長寺の来朝僧・一山一寧のもとで参禅している。その翌年の正安 2 年 (1300) には、陸奥に下って松島寺で天台講師の講経を聴聞。そこから高峰頭日のもとでの参禅のため、下野雲巖寺 (栃木県大田原市) に赴いている。その後、鎌倉で一山一寧や高峰頭日に師事した後、嘉元元年 (1303) に鎌倉を後にして陸奥白鳥 (岩手県前沢町) に隠居。翌年には常陸内草山 (茨城県高萩市) に移り、その翌年には常陸白庭 (茨城県北茨城市)、鎌倉浄智寺を経て甲斐に帰郷し、浄居寺に住している。その後 7 年余り甲斐と鎌倉を行き来したのち、正和 2 年 (1313) に甲斐を発ち、遠江を経て美濃古溪 (岐阜県多治見市) に隠居し、翌年にはこの地に観音殿 (現

在の永保寺)を建立。文保元年(1317)に古溪を去り、京都を経て翌年には土佐の五台山吸江庵に寓居する。元応元年(1319)には、請われて鎌倉に戻り、鎌倉近郊の三浦(神奈川県横須賀市)の泊船庵に居を定める。元亨3年(1323)には、三浦の泊船庵から上総千町庄(千葉県いすみ市)の退耕庵に移り、2年余りここに留まっている。正中2年(1325)には後醍醐天皇から請われて上京し南禅寺の住職となるが、約1年でそれを辞し、伊勢・紀州那智山を経て鎌倉に戻る。嘉暦2年(1327)には鎌倉二階堂に瑞泉寺を建ててそこに移り、翌年に観音殿と遍界一覽亭を建てている。元徳2年(1330)に甲斐に慧林寺を開き、翌々年にはその住職となる。慧林寺から瑞泉寺に戻った元弘3年



写真 2 現在の永保寺庭園

(1333)に鎌倉幕府は滅亡。同年、後醍醐天皇の招請に応じて上京し、翌年には南禅寺に再住。さらに建武2年(1335)に後醍醐天皇から賜った臨川寺の開山となっている。そして、暦応2年(1339)には、西芳寺の中興開山となるとともに、崩御した後醍醐天皇の菩提を弔う暦応寺(天龍寺)の開山となっている。観応2年(1351)寂。

このように、元弘3年(1333)以降示寂するまでの晩年の18年間は京都に落ち着くものの、それまでは甲斐・鎌倉・京都の行き来を中心に、北は陸奥から西は土佐まで諸国を巡っている。そのなかで多様な風景に接した夢窓疎石は、生来の風景美に関する鋭敏な感受性と美濃永保寺や鎌倉瑞泉寺の庭園に見られる造形力から、池を中心に堂舎を巡る「回遊式庭園」の形態的構想に至ったのではないかと推測する。すなわち、自らの遊行の視覚的体験を境内空間に縮小具現化したのがこの西芳寺庭園であったのではなからうか。なお、同じ年に開山として創建に関わった天龍寺に比べると、西芳寺は公的色彩が薄く、自らの構想を実現する条件に適っていたことも「回遊式庭園」の成立に与ったものと考えられる。

6. 結語

夢窓疎石が中興開山となって整備した西芳寺は、池を中心に松・桜・紅葉の植栽が彩る庭園が堂舎と一体となって素晴らしい景観を有しており、造営間もない時期から貴顕がしばしば来訪する勝地であった。この西芳寺を応永26年(1420)に訪れた李氏朝鮮使節回礼使・宋希憐と嘉吉3年(1443)に訪れた同使節書状官・申叔舟は、その庭景に感動し、詩文に書き記した。とりわけ後者の「日本栖芳寺遇真記并賦」の記述は日本の同時代の史料に比べても詳細で、当時の西芳寺の境内の復元に寄与する重要資料となっている。併せて、そこには西芳寺訪問の深い感動が余すことなく述べられている。

彼らが西芳寺庭園に感動したのは、堂舎と一体になった池庭の景色が歩行に伴って移り変わる「回遊式庭園」によるものと考えられることができる。しかも、回遊式庭園としての西芳寺庭園は、諸国を遊行した夢窓疎石が各地の自然風景のイメージを持ち前の感性で凝縮した卓越した空間構成ならびに細部意匠を備えていた。当時の李氏朝鮮の庭園は一部を除いて鑑賞本位で、しかも幾何学的な方池円島がその中心的な構成要素となっており、自然風景をモチーフとした庭園空間をそぞろ歩くという西芳寺での庭園の楽しみ方は異文化体験に他ならなかったのである。

今から約600年前、同じ東アジア文化圏の隣国からの来訪者にも大きな感動を与えた回遊式庭園は、その後とくに江戸時代を通じて大きな展開を見せ、京都の桂離宮・修学院離宮をはじめ、金沢の兼六園、岡山の後楽園、高松の栗林公園といった大名庭園、あるいは近代に入って造営された横浜の三溪園などの自然主義の風景式庭園として全国に相当数が遺っている。これらは多くが公開されており、内外の多数の観光者を集めている³⁰。この日本独自の回遊式庭園が、とりわけ訪日観光者にとっては、五感を通して異文化体験のできる魅力的な文化観光資源であることをあらためて認識し、その本来の楽しみ方を活かしつつ創意工夫も加味した積極的かつ適正な活用がさらに進展すれば³¹、その文化観光資源としての価値は一層増大するものと考えられる。

*本稿は、JSPS 科学研究費基盤 C「我が国の庭園観光の適切かつ持続的な推進に向けた研究」(研究課題/領

³⁰ コロナ禍前の2018年度、代表的な回遊式庭園(大名庭園)である兼六園では総入園者数が2,748,174人、うち外国人入園者が444,504人と約六分の一を占める(小野2020)。

³¹ 例えば栗林公園では、回遊式庭園で本来よく行われた舟遊の体験を来訪者に提供して好評を博している。

域 番号 19K12547、代表者：小野健吉）の成果の一部である。

【史料】

- 1) 岩橋小弥太・斎木一馬校訂（1971）『園太暦（巻二）』続群書類従完成会
- 2) 岩橋小弥太・斎木一馬校訂（1971）『園太暦（巻三）』続群書類従完成会
- 3) 京都大学貴重資料デジタルアーカイブ「夢窓国師語録・年譜 語録2巻、年譜1巻」
<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00012938#c=0&m=0&s=0&cv=147&r=0&xywh=-1889%2C208%2C4263%2C1137>
- 4) 京都帝国大学文学部編（1920）『満濟准后日記（一）』平安考古会
- 5) 京都帝国大学文学部編（1920）『満濟准后日記（二）』平安考古会
- 6) 谷村一太郎（1933）『校注 老松堂日本行録』大洋社
- 7) 玉村竹二・勝野隆信校定編集（1953）『蔭涼軒日録 巻一』史籍刊行会
- 8) 玉村竹二・勝野隆信校定編集（1954）『蔭涼軒日録 巻二』史籍刊行会
- 9) 朝鮮史編修会編（1937）『朝鮮史料叢刊 第十四』
- 10) 辻善之助編著（1939）『空華工夫日用略集』大洋社
- 11) 塙保己一編・太田藤四郎補（1957）『続郡書類従・第二十七輯 积家部』、続群書類従完成会
- 12) 塙保己一編・太田藤四郎補（1959）『看聞御記（下）』続群書類従・補遺二（訂正三版）、続群書類従完成会

【文献】

- 1) 小野健吉（2004）『岩波日本庭園辞典』岩波書店
- 2) 小野健吉（2009）『日本庭園一空間の美の歴史』岩波書店
- 3) 小野健吉（2020）「兼六園の活用と管理運営の展望」『観光学』22号 pp.37-49
- 4) 元貞喜・白在峰（1991）「韓国・朝鮮時代の伝統的池塘庭園の策定手法に関する研究」、『造園雑誌』54巻5号 pp.1-6
- 5) 重森三玲・重森完途（1971）「西芳寺庭園」、『日本庭園史大系第3巻 鎌倉の庭（一）』社会思想社 pp.50-92
- 6) 関西剛康（2012）「『空華工夫日用略集』に見る14世紀後半の禅宗庭園観に関する研究」、『ランドスケープ研究』75巻5号 pp.367-372
- 7) 高橋桃子（1997）「中世西芳寺の歴史と庭園観」、佐伯有清編『日本古代中世の政治と文化』pp.354-381 吉川弘文館
- 8) 玉村竹二（1958）『夢窓国師』平楽寺書店
- 9) 外山英策（1934）『室町時代庭園史』岩波書店（復刻：思文閣1973）
- 10) 中島義晴・内田和伸（2021）「韓国庭園史略とその代表的な事例」、『奈良文化財研究所学報 第100冊』pp.369-424 奈良文化財研究所
- 11) 中根金作（1992）『京都の庭と風土』加島書店
- 12) 久恒秀治（1969）『京都名園記 下巻』誠文堂新光社
- 13) 飛田範夫（2006）『庭園の中世史』吉川弘文館
- 14) 藤井英二郎（2022）「韓国庭園」『造園大百科事典』pp.52-53 朝倉書店
- 15) 三宅英利（1988）「通信使」、国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第9巻 pp.706-708・吉川弘文館
- 16) 森蘊（1959）『中世庭園文化史』奈良文化財研究所